# TALK#2

トークサロン

2019年10月12日

令和元年10月12日、「邦久庵茅葺き屋根を学ぶ会」を開催しました。

大分の日田より、邦久庵の屋根を19年前に葺いた株式会社奥日田美建・三苫義久棟梁をお招きして。台風19号の影響で大風吹き荒れる中でしたが、3時間ほどじっくりと、30人の参加者が邦久庵での時間を共にしました。『超高層から茅葺きへ』という池田武邦さんの著書もあるように、邦久庵のシンボルとも言える茅葺き屋根。どのようなこだわりが詰まった屋根なのか、その改修の必要性、今後の葺替えに向けて何ができるのか、そもそもどのように葺かれたのか。

邦久庵倶楽部の関係者のみならず、長崎・佐賀・福岡・東京、そして邦久庵の所有権を継承した新オーナーである英国人のジョナサン氏も通訳を介して熱心に耳を傾けました。

貴重な内容を伺うことができた同会の内容を抜粋してご紹介します。

三苫義久 | Yoshihisa MITOMA

屋根師。大分県日田市を拠点としながら、現在は九州北部を中心に幅広く茅葺き屋根の仕事を手掛ける。株式会社奥日田美建社長。

## 池田武邦と、三苫義久と邦久庵

**永野**　本日は「邦久庵茅葺き屋根を学ぶ会」ということで、邦久庵の茅葺き屋根を葺いた屋根師の三苫義久様にゲストでお越しいただきました。三苫さん、さっそくですが、池田さんが三苫さんに声をかけた理由・経緯からお聞かせくださいますか。

**三苫**　理由はね。池田先生は大体、地元の業者に頼んだようであったけど、近くに琴海町って言いよったね、ナベジュンさんって瓦屋さんがおってね。その瓦屋さんが日田の瓦屋さんと付き合いがあって、そして「三苫さん、こういうふうに屋根を頼みたいって言いよるが」って言うんで「いいですよって」って、最初そのぐらいだ。ナベジュンさんも瓦のことは詳しいけど、茅葺きのことは全然見積りも何もできんからって。図面を見たら、下地をどうするかとか、全部池田先生と大工さんが、自分で設計はしちょるわけですよね。この柱なんかも大きいのを使って。普通この大きさぐらいだったら11㎝か12㎝ぐらいの柱ですけど、二つも鳥居のような大きなやつを作っていて、びっくりした。

**会場**　梁も柱も太いですもんね。

**三苫**　「技術的なことはあなたに任せるから」という条件でした。19年経ってまだ一度も大きな補修はしていない中で、特に風の強い西側の軒、けばら等も傷んでない。今日改めてまた、当時としてはいい屋根が葺けておったなと。

永野　できたあとも三苫さんは結構何度かいらっしゃってたんでしょうか。

**三苫**　うん、先生とは何遍もお会いしてると。「三苫さん、魚釣り来なさいよ、この縁から釣らるる」ごと言うて。

**永野**　メンテナンスとかじゃなくて遊びに。

**三苫**　うん、長崎に来て帰るついでとか、若手と近くにくる時に、「こげなとこも葺いたばい」っていって見にきたりもしよった。

**永野**　今日、久々にみていただいた邦久庵の屋根、いかが感じられたでしょうか？

**三苫**　確か、裏面についての相談が途中で12年ほど前だったかにあった。そのとき、南側の木立が屋根に一部覆いかぶさって。だから「先生、これ切ってください。茅葺き屋根に木の葉っぱがあって、ぼてぼてとした雨水が落ちかかると、普通の雨と違って傷みが激しいですよ。日も当たりません」ということで切ってもらったけど、それくらいで何もしていないはず。そして、今の状況になった。本来であれば大体もう4-5年ぐらい前に、一度全体補修をすべきであったかとは思っております。もう長くは置かれません。長く置くと今見え始めてしまっているタケがよけい出てから。今だったらまだ腐っちゃおらんよ。色は変わってるけどね。

**永野**　じゃ、もう結構ぎりぎりなんじゃないかってことですね。

**三苫**　うん、ぎりぎり。「差し葺き」「差し茅」というのをやることになります。今の茅を20-30㎝引き抜いて、屋根面が柔らくなったら、柔らかくなった分を補足する。60㎝ないしは80㎝に切った、屋根の傷みようによって長さを変えながら切って、屋根をすくい上げてその下にまんべんなく差してあげて。また打ち込みながら頂上まで上がるわけです。棟まで全体が終わったら、「ほめる」。最後に一面ずっとならしながら下りてというのを。

**永野**　ほめる？

**三苫**　屋根葺き言葉で仕上げるという意味。自分の子供を親がほめた時、「屋根葺きのてばめたい」と、自分でしたものを自分でほめるということで、田舎ではそういうことわざがあります。自慢するなという意味もあるわけですね。そういうことで、ほめて下りて、きれいに葺いた時と変わらんように仕上がって出来上がるわけ。手っ取り早く話すとそういうことで、今見た時点では4年ほど遅れてはいるけれども、まだそのままの状態で屋根の補修はできますというのが今日屋根を見た結論です。で、私からの提案だけどね。

**永野**　はい、お願いします。

**三苫**　今度、補修する時でも葺く時でも、近くで見に来られたら、やっぱり聞くよりも見た方が現実的でよく分かる。葺く時とかが一番よう分かる。家主さんがそれを言ってもらえば見学でも体験でも、そうするわけです。子供たちの研修とか、福岡の糟屋郡久山町にある茅乃舎を葺く時なんか、高校生やら小学生の4年生から上ぐらいは来て、屋根の上で並べたりした。

**永野**　なるほど。ありがとうございます。池田さんがここを「わざわざ」と言うとあれですけど、茅葺きで設えたのは、技術を伝承して、やっぱり葺き替えの時とか補修の時とかにみんなが葺き替えの様子を見て、また茅葺きっていうものを理解するっていうことのために…。

**三苫**　そうそう、そうそう。

**永野**　そういうことのために茅葺きで造ったということなので、なるべく皆さんと協力しながら直したいなと思います。

## 屋根師としてのはじまりと、九州における茅葺き屋根

**永野**　奥日田美建さんはいつから会社としてやられているのですか。三苫さんは、どのような経緯で茅葺きの世界に。

**三苫**　私は昭和62年からだから、30年ちょっと。それより前は、私は農協に勤めたり、畜産公社の牛飼いをしたり、木材市場を設立に関わったりね。

畜産公社しよった時に、牛肉の自由化で大暴落して、もう牛飼いも公営でやってもだめだということで、木材市場の設立組合にね、日田は中径木の集散地で、ずっとその辺の一体の材を集めて、その頃は杉皮がいくつかの製材所からは出てたけど、今、大きな製材所は、ローラーでやるようになって、もう杉皮葺きの材料が取れんごとなった。山師さんと懇意に付き合いをしたりしながら、屋根葺く材料だけぐらい何とか手には入れよるってことで。

**永野**　杉皮葺きがスタートってことですか。

**三苫**　そうです。杉皮葺きが日田は多かったの。私が始めた頃は日田で150棟ぐらいあって。でも茅葺きの仕事もたまたまあちこちあって、しよったら口コミでいろんなところから呼びがかかるようになって、今はもう茅葺きが多い。

**永野**　勝手な先入観だったのですが、思ったより新しいんですね。他の会社さんとかはもっと昔からのところもあるのですか。

**三苫**　ううん、ないね。もう代が替わってしもうてね。皆新しいです。私の先生で一番日田で古かったのが、江戸末期からで5代続いとるけど。復興の頃に里山に木を植えてみんなで管理するようになったから、野焼きをせんようになったり、木を植えてしまって茅場がなくなった。もう茅葺きというのがなくなってしまう。うちの息子が跡取りしたっちゃつまらんということでして。

**永野**　奥日田美建さんは、どこから茅を。

**三苫**　阿蘇のね、私たちの場合は北側。大分寄りの方で切って、小国、南小国、産山。毎年野焼きをしないといい茅が育たんわけ。野焼きしないと株立ちの茅になって、こう曲がって生える。すると上からしか材にならんわけ。野焼きをすると一本一本の株になる。それで元の曲がったのが少ないわけですね。

**永野**　阿蘇の茅場はどなたが管理・所有しているんですか。

**三苫**　それは牧野組合とか入会地、町村とのね。そういった入会とか組合の方の許可なくして切ることはできない。野焼きにも手伝いに行かにゃいかん。私の場合は阿蘇の南小国町の農家の方と懇意で、もう三十五六年付き合いがあるからもう普段の世話は地元の農家の方に依頼しておるけど、そういうお世話をしてくれる人が高齢化になって、今度はその跡取りが少ないんだ。それで今はもう関西の方は若手の職人を派遣してきちょって切る。

**永野**　茅葺き業者さんとしても今や長崎には、ほとんどいらっしゃらないと思います。

**三苫**　今、長崎は全くいない。九州でも4社ぐらい。もう宮崎にもいないし鹿児島にもいないし、いるのはいるけど、隣近所のやつをちょっと補修するぐらい。あとは八代の方と、阿蘇と。人吉に多いもんね、茅葺きは。国宝の阿蘇青井神社とかね。日本で国宝の茅葺きは一つしかない。

## 屋根師、その美的感覚

**三苫**　私は生まれた家がたまたま大きな茅葺きでしたから、子供の頃からなじんでおったんです。茅葺きにしようが、葦葺きにしようが、屋根は一つの芸術心ちゅうか。子供の頃から絵をよう描きよった。そうじゃき、もう小学校・中学校までは、県やらがすると必ず入賞して絵具もろうたりしちょるけん。自分でクレヨンとかを買うてもらわんでよかった。懸賞くれるき、絵を描いて出せばよかった。

**会場**　すごいですね。

**三苫**　そういうこともあって、屋根の形も、この屋根はぱっと見た時に横幅と縦とのバランスがどうじゃからということがすぐ分かる。そうじゃき、「絵心のない者はだめよ」とは言うよ。興味が長く続かんですよ。自分たちで作った、揃えて上がった屋根の出来上がりが、そこの屋敷と美的感覚で釣り合いが取れとるかとか、そこまでやっぱり考えんとね。興味がわかん。葺くだけじゃ。長続きせんね。やっぱ好きになるということは、自画自賛でしてしもうてだめだけど、ある程度そういう感覚的なものも持ち合わせてもらわんといかん。

**永野**　プライドみたいなところですね。

**三苫**　微妙な角度の作り方で屋根がこう、まず両サイドがきれいに行ってるか。下の軒がきれいに行ってるか。上の長さに対する角度とか丸味が、ほんと、もうこれ以上のものは、ここの場所ではできんねというような感覚でやら

にゃ。俗にいう、田舎言葉で、単なるひゆとり（日雇い）ならだめ。他の職業よりも、若干はハードできつい。一本木の足場の上で仕事をするわけでね。あと、やはりそれなりの苦労と喜びも、家主さんともどもに分かち合わんと。それで、いつも家主さんには最初に「どんなふうにしますか」とか「どういうことを希望しますか」とは言うわけ。そして「今まで通りでいいよ」とか、もっと言うと、「こみいっちゃってもいい」とか言われれば、ちりを上げたり、ほてつってからこう巻いてね、したりする。

**永野**　邦久庵の屋根勾配っていうのは三苫さんがお決めになったんですか。それともう池田先生と大工さんで予め決めてあったんでしょうか？

**三苫**　いや、これはもう先生がちゃんとね。大体九州の屋根はほとんどが45度としたもんだ。ここも45。のはずだが、45度からちっとはきついかもしれん。角度がきつい方が長持ちする。それが飛騨高山の合掌造り。白川郷辺りは60。近い。そうすると、水の流れが速いから20年ぐらい長持ちする。九州のこんな屋根よりね。

**三苫**　あと屋根が窪まんようにすること。しゃくんだ屋根を葺いたら長持ちしない。水がそこに、こう溜まって。流れが遅くなっていく。いくらかこう丸味を帯びた感じで葺いたぐらいが、ちょうど5年10年たった時に平らになって。

**永野**　じゃ、少しむくらせたいってことですか。

**三苫**　うん、わずか。

**永野**　それは最後にはさみで切っていって、ちょっとこうむくんだ形に整えるっていうことですか。

**三苫**　いえいえ、もう葺く時にそういうようにして。

**永野**　もう茅を積んで並べた時点で、ある程度こうむくんだ形に仕上がると。

**三苫**　うん、そうです。それでも遠くから見た時は真っ直ぐ下りたように見えるくらい。

**永野**　すごいです。

**会場**　佐賀の葦葺きの屋根を見てると、真ん中がこういうふうに緩やかな曲面になってるような気がするんですよね。

**三苫**　棟のところですね。

**会場**　はい。あれはどういう目的があって。

**三苫**　美しく見せるため。瓦屋根の両サイドにね、鯉が上がっちょったり、真ん丸いおたふくのようなんが上がっちょったりするでしょう。両サイドが高いときれいに見える。するけど、茅葺きの場合はそこだけに作るわけにはいかんわけ。だからここも、わずかこう中央を低く。

**会場**　一番最初、できた時には直線のように見えるけど。

**三苫**　大体は真っ直ぐでいいの。けど、こう両サイドが上がっておかんと品が悪いですき、そういうようなことで、屋根はですね。棟は若干下がって中が低くした方がきれいに見える。もうそれだけで。

両サイドが跳ねるか上がるかしておくと、屋根の形がよくできる。美的感覚の方だけの問題で、丈夫さには関係ない。ここも造りたての時はよかったけども、今はちょっとつなぎの棟木が傷

※鉾竹
茅を外側から押さえつけて留めている水平方向の竹材。

んで離れたりしとるわけ。それで組み直さんといかん。

**会場**　棟木の端部も、木の断面はやっぱり根っこみたいなそりがあってかっこいい。そういうものを探してくるわけですか。

**三苫**　そうです。あれは探すのに大変なんです。周りと株の曲がり具合。それをこうして30本か40本で。合うやつをこう合わせて、合わせるのに、それでも山の中をあっち見、こっち見して。

**永野**　ここは千木もかなり独特に見えます。

**三苫**　合掌ともいいます。何本上げるか、大体奇数で上げるんですよね。1ちゅうのはない。2ちゅうのもない。3か5か7か、8ちゅうのは時々ある。8は縁起がいいから。

**会場**　なるほど。末広がりで。

**三苫**　あとは9、よほどあって11までです。

**永野**　数えると邦久庵は…9本ですね。

**会場**　センターを1本決めるから、置いてきゃ必ず奇数になるということかあ。

**三苫**　そんなもんですね。大体奇数で上げるようになってます。

## 土に還る材、その生かし方

**三苫**　屋根の面の茅1本の深さとすれば大体2㎝内外の茅で、葺いてあるわけ。鉾竹、押し鉾とも言いますけど、今、何本か一番手前にある鉾竹（※）が見えてきている。そのあと2番の押さえが50cm奥にさらにその奥に3番押さえっていってまた50cm。50cmあって、その奥が50cmあって、その奥が50cmまで押さえて、となっておる。

兵庫県辺りでは民家の場合は特に1番押さえ、1番鉾を押さえて1㎝ぐらい奥を押さえてる。で、岡山からずっとこっちに来ると2番押さえになる。九州の日田辺りで、雨量の多いところに来ると3番押さえまで行っちゃう。だから、長崎県のここ辺りも2番、3番押さえがあって、やはり2回は必ず押さえておかないと、あとの補修に困る。

**会場**　「差し茅」のときとかも奥の押さえがあると有効なわけですね。

**永野**　補修しやすくなるってことですか。

**三苫**　補修しやすいです。押さえが少ないと、引っ張り出した時、うかうかするようになるから。3番を押さえとくとなおいいんです。ここは3番押さえまで取ってるんです。

**三苫**　基本的に屋根の葺き方には二通りある。元が表面に出て葺いたのが本葺き。この屋根。それから裏さき、葉っぱが表に出て葺いてあるのが逆葺き（さかぶき）。長崎県だと壱岐に行くと逆葺きが17棟あります。あれも一応、私とこで葺かさしてもらいましたけど。

**会場**　へえ。

**永野**　茅の太い方と細い方のどっちを下にするかっていうことですよね。ここは茅の根本を下に向けて葺いてあるということですね。

**三苫**　そうです。それで、切る時期がちょっと違うんです。本葺き用の茅は1月の中下旬頃から3月の上旬頃、阿蘇の外輪山辺りで取ってるわけ。そうすると、逆葺き用の葉っぱは1月の中頃を過ぎるともう裏の葉っぱがなくなるから、12月の中下旬から1月の10日頃までに切らなきゃいかん。そういう条件も違うわけです。それで本葺き、逆葺きというのがあるよと。

そういうことで、じゃあ九州の屋根はどういうところの屋根と葺き方が似ておるかというと、関西の方から岡山・広島・山口、それから愛媛、四国を通ってきた大分県の方、山口県の方を通って来た福岡県の方で、そして長崎県のこちらの方、東寄り。それから、佐賀がまた別なんです。ほとんど主流としては九州の福岡県の久留米寄りと山間部、熊本県の山間部、有明海、芦北辺りの海岸端は葦葺きで、瓦が棟に乗ってる。

**会場**　ああ、確かに、棟のところですね。

**三苫**　うん。特に佐賀ではミミッパが作ってある。魔除けが。これが佐賀の鍋島葺きの特徴なんです。

**会場**　鍋島葺きっていうんだ。

**三苫**　うん。それで、九州の屋根の葺き方には、関西の方から来た主流の大分県、熊本県辺りのずっと宮崎、鹿児島まで伝わった葺き方と、鍋島葺きという一つの鍋島藩の平野部に始まった葺き方と二通りあって。

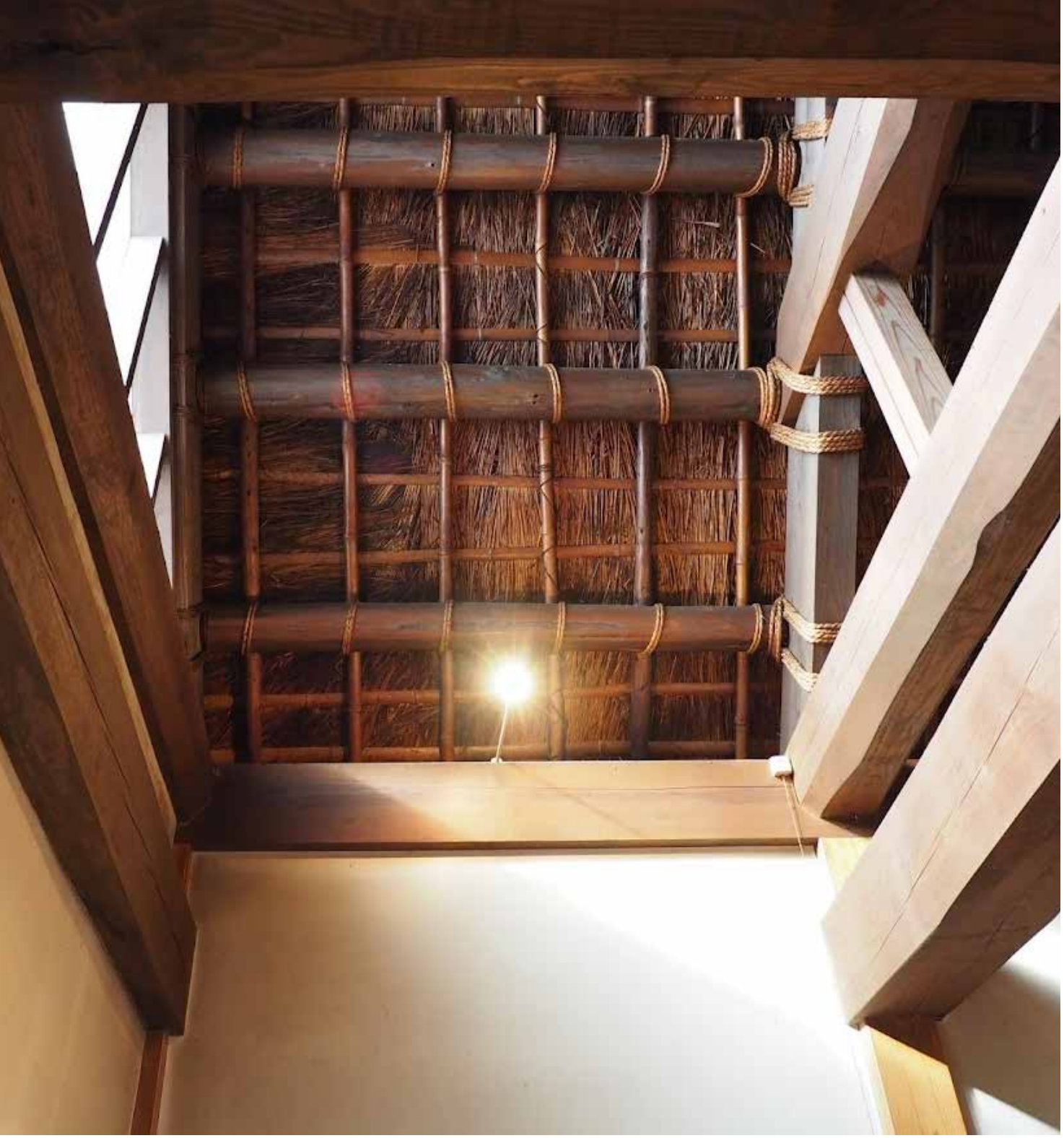
本葺きの場合、茅は裏が細いからそのまま積んで上まで上がると段々上の方はさかしになる。雨が降ってくるとその水は全部中に。

**会場**　入ってしまうね。

**三苫**　上の方はなる。だから30°で勾配を葺き上げていき出したら、一番上まで30°に持っていききらにゃいかん。そうするためには中に延べっちゅうものが要る。

**永野**　延べ？

**三苫**　埋め草のこと。埋め草とかナカ延べとか、埋め物と、延べものとか言う。勾配を保つために、茅の細いほうを奥にするから、積んでいくうちに茅の角度が段々とこう、水平に近くなっ



てきてしまう。いよいよもう平らになった時は内側に水が入る。だから、奥にこう支えを入れる。そうすれば茅の角度が同じで上がっていけるわけ。

**永野**　三角形を積んでいくから上に行くとだんだん茅の角度が水平になっちゃうってことですね。

**三苫**　うん。奥のあいだに挟んで調整する。それは古い茅の再利用でいいわけ。それで古いのを取っておかにゃいかん。これが文化財なんかで元受けさんが先に壊した場合は、必ず何もかも捨ててしまうんだけど。

**永野**　できるときは、ある程度は再利用をしながら葺き替えをしていくわけですね。

**三苫**　そう。私たちが解体する時は必要なもんは残しておくんだ。延べ用のものといって取っておくと、見積りも安くできる、早い話がね。そうした詰め物にもならないくらい朽ちたものはどうするかというと、これも取っておいて畑に入れる。大変いい肥料になります。

## 茅葺き屋根は乾燥が大切

**三苫**　今は桁が真っ直ぐにできてるわけです。昔はここの梁みたいに全部曲がった材でしてあったから、いろいろ段差があった。それで平面いかんかったけど、今は桁が角材でしてあるから。そして、桁とサスと交差したところを八ツ縄でくくる。八ツ縄という意味は、上側の線が4本。そして1本の屋中がこうあると、こっちがまた4本あって、数えると8本で区切ったように見せるから八ツ縄。

**会場**　ああ、そうだ、なってますよ。

**永野**　屋内にも見えているような結び縄のことですね。何の材料でできてるんでしょうか、この八ツ縄は。

**三苫**　八ツ縄はわらです。

**会場**　よく持ちますね。

**会場**　きれいですね。

**三苫**　緩んだのがあれば今度でもかけ替えればいい。若干ここの焦げたような色付きがしてるのは、いろりで蒸したから。いろりで蒸すということは、煙の油と乾燥。これが虫よけになったり、外気から入った水分を弾くわけ。だから、縄が固くなって長持ちする。最近の家はいろりがなくてお風呂場も炊事場も全部サッシガラスの窓の内側にある。そういうところの屋根はこの縄だって15年も経つと朽ちてしまう。それでなかなか。

**会場**　固くなって切れやすくなるっていうことはないんですか。

**三苫**　とてもじゃない、固くなると、薄鎌でパチンと1回でたたいたって切れんようになる。煙の油分と乾燥でだんだんと強くなる。

**会場**　すごい。

**三苫**　いまだに150年、200年たっても替えてないものがあるんです。屋根の形状もいろいろあって、通風をよくしてある屋根もあれば、寄棟で全く風が入らんようにしてある屋根もあるわけ。入母屋で一部、けらばがこう、妻が瓦葺でもあって、そこに格子があって、鳥やら獣が入らんように網とか格子の枠はして、風がよく通してあればわらの縄は腐らんわい。

**会場**　なるほど。

**三苫**　最近の高温多湿で非常にわら縄の持ちが悪くなった。もう弱いんです。雨とか濡れて風が当たらんと蒸れてすぐ腐っちゃう。それで、軒先から出る分は麻縄、シュロ綱でやってたんですけど、もう今は完全なシュロ綱っていうのが日本では手に入りにくいんだ。ヤシ殻をたたいてその殻を紡いで、なって色を付けたのが、今出回っておる垣根なんかに使うシュロ綱。特殊な祭りごととかでなう時は地元の方がなったりするけどね。

**会場**　強くなるっていうことは、緩んだ部分だけを締めてあげれば、縄は元々のあるやつを使い続けていった方がいいっていうことですか。

**三苫**　そうです。わらはですね。湿らかしたら伸びたまんまになる。乾燥しておれば、それはずっとそのままの強さで、強く締まったままましてるんです。そういう特性っていうか、いい面、悪い面を兼ね備えているわけですね。

**永野**　茅もわら縄も、とにかく乾燥が大事なんですね。

**三苫**　そう。茅葺きは乾燥を欠かさないこと。しっかり風通しして、囲炉裏を毎日焚いて、屋根を常に乾燥させておかないと、湿気たところを虫が食いにくる。屋根を直したとしても、しっかり乾燥させておかなければまたすぐダメになることだってある。ここを運営される皆さんの仕事が大事ということです。

**永野**　そろそろ、お時間が来てしまいました。一度これで茅葺きのお話し会は終了にしたいと思います。三苫さん、今日は貴重なお話を本当にありがとうございました。

**一同**　ありがとうございました。（会場拍手）